

電気通信大学 平成21年度シラバス

| | | | |
|---------|--------------------|----------|-------|
| 授業科目名 | メディアリテラシー | | |
| 英文授業科目名 | Media Literacy B | | |
| 開講年度 | 2009年度 | 開講年次 | 2年次 |
| 開講学期 | 前学期 | 開講コース・課程 | 昼間コース |
| 授業の方法 | 講義・演習 | 単位数 | 2 |
| 科目区分 | 専門科目-学科専門科目-選択必修科目 | | |
| 開講学科・専攻 | 人間コミュニケーション学科 | | |
| 担当教官名 | 児玉 幸子、師井 聡子 | | |
| 居室 | 西6-411 (児玉) | | |

| | |
|-----------------------|------------|
| 公開E-Mail | 授業関連Webページ |
| moroi@im.dendai.ac.jp | |

| |
|--|
| 【主題および達成目標】 |
| われわれが囲まれているメディア環境（マスメディア、パーソナルメディア）についてその特性を理解するとともに、制作を行うための基本的感覚と技術を身につける。講義によって与えられたテーマについて、実際にコンテンツを作ることによって検証し、その結果をレポートと制作した課題として提出する。 |

| |
|-------------------------|
| 【前もって履修しておくべき科目】 |
| なし |

| |
|------------------------------|
| 【前もって履修しておくことが望ましい科目】 |
| なし |

| |
|---------------------------------|
| 【教科書等】 |
| 教科書は特に指定しない。参考書は、随時、授業のなかで提示する。 |

【授業内容とその進め方】

授業は、前半を講義形式、中盤でワークショップ、後半の2回を学生の発表、講義、ディスカッションで構成する。

第1回 イントロダクション 現代におけるメディアとは何か メディアリテラシー概念の紹介

第2回 映像とメディア

CMや実験映像の事例から、映像による視覚的効果や心理効果について検証するとともに、映像メディアのもつ社会における効果と役割について考える。

第3回 映像における音のはたらき

CMや実験映像の事例から、映像における音の効果について検証する。

第4回 メディアとアルゴリズム

コンピュータによって、様々な情報の入出力を一元的に制御することにより、様々なコンテンツを画像処理からバーチャルリアリティまで、アルゴリズムをユニークに活用した様々な事例について理解する。

第5回 メディアとネットワーク

インターネットや様々な情報通信技術により、社会は双方向のメディア環境を手に入れた。そこで可能となるさまざまな事例について理解し、新しいメディアを扱うために必要な技術と考え方について述べる。またデジタルデバイドのについて考える。

第6回 コンテンツ制作の準備

コンテンツ制作を行うためには、企画を視覚化し推敲するための準備が必要である。絵コンテや企画書を実際に制作し、コンテンツ制作に必要な準備について理解し、技術を身につける。

第7～12回 メディアリテラシー ワークショップ

講義で用いたテーマにそって企画した内容に沿って、グループごとに分かれて、課題を制作する。実際に映像や音声を収録しデジタルコンテンツを作成し、適宜、中間の講評やアドバイスを受ける事によって、メディアを使いこなして情報を発信するための基礎を身に付ける。また、パーソナルメディアとマスメディアの融合、相乗効果、問題点について議論する。

第13回 課題の発表、グループディスカッション

第14回 まとめ

コンテンツ制作技術における技術的重要事項と、メディアの社会への影響について理解し、メディアリテラシー向上のために成すべきことをまとめる。レポート出題。

【授業時間外の学習（予習・復習等）】

実習では西6号館3階のPCルームを利用します。授業時間以外にもPCルームは大学の規則の範囲内で利用可能です。PCルームとソフトウェアの利用の仕方は授業中に指導します。

電気通信大学 平成21年度シラバス

【成績評価方法及び評価基準(最低達成基準を含む)】

出席度30%、中間のレポート30%、最終課題40%の総合点にて成績を評価します。

【オフィスアワー：授業相談】

オフィスアワーは特に設けないので、e-mailにて連絡のこと。

【学生へのメッセージ】

テレビ、新聞、雑誌などのマスメディアをただ鵜呑みにするのではなく、誰がどのような意図で情報を発信しているか意識的に見るのが大切です。新聞と、インターネットでの情報の伝わり方の違いにも着目して日常を過ごすようにしてください。また、様々な新しいデジタルコンテンツを目にした時には、ぜひ、どのようなシステムや技法が隠れているかを考えてみてください。

【その他】

なし